

平成23年度 アートミュージアムラボ メッセージ&プロフィール コーディネーター 建島 哲（たてはた あきら）

メッセージ

美術館はたとえてみれば市民社会という海に浮かぶ船のようなものかもしれません。海からの浮力が働かなければ、つまり市民の支持が得られなければ、航海を続けることができないのです。美術館が地域社会との関係を積極的に構築する必要があるのはそのためです。今回のミュージアムラボでは、レクチャーと相互討議、そして事業体験プログラムを通して、参加する皆さんとともにコミュニティーの形成にアートが、そして美術館がどのように関わりうるのかを具体的に検討してみようと思います。

最初に取り上げるのは、地域社会におけるミュージアム・リテラシーをいかにして向上させるかという課題です。ミュージアム・リテラシーとは利用者の側の美術館を使いこなす能力のことですが、また美術館の活動に対する批評的な読解力という意味でもあります。美術館が独善性や孤立に陥らないためには、敷居を低くすることも重要ですが、同時に利用者の美術館に対する認識を高めるための努力もなされなければなりません。ゲストスピーカーによる先駆的な取り組みの事例報告を受けて、少人数に分かれたセミナーを行う予定です。

二つ目は地域社会における美術館のアウトリーチ活動はいかにあるべきかという問題です。この点に関しては、埼玉県立近代美術館の近隣の商店街や公園における5組の美術家による〈回遊美術館〉の展示やトークの現場に参加していただき、その体験をもとに地域との連携の現実的な課題を検討することにします。

三つ目は美術館におけるジャンル横断的なプロジェクトのあり方を考えることです。具体的には埼玉県立近代美術館の吹き抜けに仮設された茶室の〈方丈庵〉でダンスや詩の朗読と音楽のコラボレーションなどの実験的なプロジェクトを体験し、「メディアとしての美術館」の可能性についてアーティストと共に討議します。

美術館は地域社会のシンボルたることを期待される一方で、先端的なアートの活性化にも寄与しなければなりません。このラボはともすれば二律背反になりかねない難しい役割を担って、美術館がどのように航海の舵を取っていくべきかを皆さんと話し合う、スリリングな機会になることでしょう。

コーディネーター プロフィール

建島 哲（埼玉県立近代美術館館長）

1947年京都府生まれ。1972年早稲田大学文学部仏文学科卒業後、新潮社勤務、文化庁を経て、国立国際美術館研究官（1976-1991年）。多摩美術大学助教授・教授（芸術学科）。2005年国立国際美術館館長、独立行政法人国立美術館理事。コロンビア大学客員研究員（2000-2003年）。東京藝術大学客員教授（2008-2010年）。2011年より埼玉県立近代美術館館長、京都市立芸術大学学長に就任。専門は近代と現代の美術。1990年、1993年ヴェネツィア・ビエンナーレ日本館コミッショナー、2001年横浜トリエンナーレアーティストティック・ディレクター、2002年釜山ビエンナーレ・エキジビション・ディレクティング・チーム（4名体制）、2010年あいちトリエンナーレ芸術監督。代表的な詩集に「余白のランナー」（思潮社、歷程新鋭賞受賞）「零度の犬」（書肆山田、高見順賞受賞）などがあり、美術評論家としてのみならず、詩人としても有名。

埼玉県立近代美術館（the Museum of Modern Art, Saitama）

1982年11月3日、緑豊かな北浦和公園内に開館。愛称MOMAS（もます）。黒川紀章の建築はグリッドを基調に曲面ガラスを多用し特色ある空間を構成。モネ、ピカソ、藤田嗣治、横山大観ら巨匠の作品と、日本の近代美術をリードした埼玉ゆかりの美術家の作品を所蔵・公開。特色ある企画展やMOMASの扉など多彩な普及プログラムのリピーターも多い。ユニークなデザイン椅子や史上の名脚に坐れる椅子の美術館としても親しまれている。2006年「人々が集い、参加し、交流するための基地となります。」など新たな活動の柱を定めたミッションを策定。美術館友の会（Fam's）、美術館サポーターや彫刻ボランティア、SMF（サイタマ・ミュージズ・フォーラム）など、芸術や地域活動に携わる支援者たちとさまざまな協働をはじめている。